

# 博士学位論文審査要旨

2016年1月18日

論文題目： 限界芸術論と現代文化研究  
—戦後日本の知識人と大衆文化についての社会学的研究—

学位申請者： 栗谷 佳司

審査委員：

主査： 社会学研究科 教授 鶴飼 孝造

副査： 社会学研究科 教授 板垣 竜太

副査： 関西大学社会学部 教授 小川 博司

要 旨：

本論文は、鶴見俊輔による「限界芸術論」を中心に、戦後日本の知識人が大衆文化をどのようにとらえたのか、またその言説が大衆文化の担い手たちによっていかに用いられたかについて、1960年代後半に活発化した関西フォークソング運動を事例に分析をおこなおうとするものである。特にその理論的な支柱であった片桐ユズルや、作詞家・歌手として活躍した中川五郎にインタビューを重ねることによって、その言説とライフヒストリーに「限界芸術論」の一貫した応用・展開と実践のあり方を見出そうとするところにこの論文のオリジナリティがある。

第1章においては、鶴見の限界芸術の理論と、その大衆文化への応用である流行歌論について、他の思想家による大衆文化論と比較しながらそのコミュニケーション理論としての特徴が抽出される。

第2章では、鶴見と関係する片桐ユズルの言説と、著者が片桐におこなったインタビューから、関西フォークソング運動とその展開について考察し、鶴見の限界芸術論がどのように音楽文化に応用されていたのかについて、替え歌の多用やアメリカ文化のローカル化の視点から分析がおこなわれる。

第3章では、運動の中心的雑誌『フォーク・リポート』と、それに関係する知識人や批評家の言説を分析し、フォークソングという文化運動が言説としてどのように立ち上がったか、また、その批評がいかに確立されていったのかが、多くの資料を用いて示されている。

第4章では、関西フォーク運動に関わった歌手、中川五郎氏に著者がおこなったインタビュー記録および関連文献資料の分析から、「素人」であった高校生がどのように歌手、編集者、批評家になっていったのか解明が進められ、そのプロセスが、鶴見のいう限界芸術における「非専門家」という位相と、それが時代とともに変容していくケーススタディとして論じられている。

本論文を社会学の観点から読み直すならば、鶴見の限界芸術論が、プラグマティズム哲学から生まれたコミュニケーション論にもとづいていること、それが市民の文化運動のネットワークや、大衆文化や消費文化を分析する上でも有効であることを、大量の関連文献と一次資料の読み込み、地道なインタビュー記録の蓄積、関係者のネットワークの解明を通じて明らかにしたことが高く評価される。

半面、より広くフォークソング運動を取り巻く当時の歴史的状況の把握の仕方や、限界芸術と大衆芸術の関係性の理論的整理について、なお改善の余地があることが指摘された。しかし、本論文のオリジナルな視点と、それを積極的に実証しようとする態度を評価するとともに、今後のさらなる研究の深化と展開に期待することで審査委員間の意見の一致を得た。

よって、本論文は、博士（社会学）（同志社大学）の学位を授与するにふさわしいものである

と認められる。

## 学力確認結果の要旨

2016年1月18日

論文題目： 限界芸術論と現代文化研究  
—戦後日本の知識人と大衆文化についての社会学的研究—

学位申請者： 栗谷 佳司

審査委員：

主査： 社会学研究科 教授 鵜飼 孝造

副査： 社会学研究科 教授 板垣 竜太

副査： 関西大学社会学部 教授 小川 博司

要 旨：

2016年1月8日、午前10時から90分にわたり、溪水館1階会議室にて、本論文の公開学術講演会を開催した。栗谷佳司氏による報告の後、審査委員および出席者より活発な質疑応答がおこなわれ、栗谷氏はすべての質問に的確に解答することができた。

その後、同日午前11時30分から45分間、口頭試問を実施し、審査委員から、提出論文の内容および関連理論の理解や、インタビュー記録など一次資料の分析方法について、さらに質疑がおこなわれた。それに対し、栗谷氏は十分な応答をし、専門分野に関する十分な学力を有することが確認された。また、語学試験（英語）も引き続きおこなわれ、関連文献の読解を中心に審査委員から質問がなされたが、それにも栗谷氏は問題なく答えることができた。

以上のことから、本学位申請者の専門分野に関する学力ならびに語学力は十分なものであると認める。

# 博士學位論文要旨

論文題目： 限界芸術論と現代文化研究  
—戦後日本の知識人と大衆文化についての社会学的研究—  
氏 名： 栗谷 佳司

## 要 旨：

本論は、文化とコミュニケーションに関する社会学研究として、戦後日本の知識人が大衆文化、表現文化と関わることで、その言説がどのように大衆文化を捉え、どのように展開されていったのかについての考察である。この課題について、本論では戦後日本の思想家、鶴見俊輔によって1960年代に唱えられた「限界芸術論」を中心に考察しながら、この理論の社会学研究における大衆文化論や現代文化研究へのアクチュアリティ、また「限界芸術論」という言説に関係する人々が社会的なネットワークにおけるコミュニケーションのなかで交差することで、この言説がどのように変容し応用されていったのかということについて研究を行った。

そして、このことを検証するために、本論では具体的な対象として、日本の1960年代半ばから70年ごろの関西を拠点としたフォークソング運動を中心とする音楽の表現文化について取り上げた。これまで、フォークソングや音楽を中心とした表現文化と鶴見の議論との関係は正面から分析されてきているとはいえないが、本論のように焦点を当てることで「限界芸術論」を通して、この理論が関係者にどのように影響を与え応用されたのか、そのときに鶴見と関係する人々がどのように関わったのかというネットワークとそのコミュニケーションが考察された。そして本論では、フォークソングの文化に関わった歌手である中川五郎の活動をケーススタディとして、鶴見の「限界芸術論」の応用とでもいえる、人は「素人（アマチュア）」からどのように表現者となっていくのかということについて、それを消費社会と言われる70年代以降の文化と思想状況と共に分析し、その展開について考察した。

本論の「第1章 限界芸術論の研究」では、本論の中心となる理論的前提として鶴見の限界芸術論における流行歌論を分析し、鶴見と文化研究、大衆文化論の思想家の議論とを比較することによりその現代的課題を考察した。

「第2章 「限界芸術論」からフォークソングの運動へ」では、鶴見と関係する片桐ユズルの言説と片桐に行ったインタビューから「関西フォークソング運動」とその展開について分析を行った。鶴見の「限界芸術論」の問題設定がどのように音楽文化に応用されていたのかについて、「限界芸術論」をめぐる大衆文化への広がりからフォークソング運動への影響関係を片桐のテクストを中心に考察した。そして、これまで顧みられることがほとんどなかった鶴見と音楽文化の接点とその展開について分析した。

「第3章 表現の文化と言説の空間」では、関西フォークソング運動の中心的な雑誌であった「フォーク・リポート」とその周辺に関わった知識人、批評家の言説を分析し、「フォークソング」という「音楽文化」「運動」が言説としてどう立ち上がったのかについて分析した。そして、この時期のポピュラー文化である音楽文化が批評としても確立されて行く時期の大衆文化の言説空間について、資料を用いて複数の雑誌媒体と関係者の言説を比較しながら分析した。

そして、「第4章 「素人」の時代の表現者」では、関西フォークソング運動に関わった歌手、中川五郎氏に行ったインタビューから、ライフ・ヒストリーとしての語りの調査と文献資料により「素人」であった高校生がどのように歌手、編集者、批評家になっていくのかというプロセスについて考察した。これは鶴見の限界芸術論における、「非専門家」という位相とそれが時代とともに変容していくケーススタディとして考察した。

最後の「終章」では、まとめを行い、そこで、以下のように結論づけた。

第一に、鶴見俊輔の『限界芸術論』の射程をプラグマティズムの流れから「芸術の展開」と「流行歌の歴史」を中心に分析し、鶴見の「流行歌の歴史」は『限界芸術論』を考えると、その具体的な応用として、たとえば「限界芸術」を「純粹芸術」と「大衆芸術」に分けるもののみではない、「限界芸術」が「大衆芸術」をつなぐ事例であることを示した。特にそれが「替歌」の「ふし言葉」から分析されていることについて考察した。これが、鶴見の「限界芸術論」の射程において「大衆芸術」や「大衆文化」を考える契機ともなるということに言及した。

「限界芸術」は、1960年代半ばから関西を中心とした「フォークソング運動」に展開されており、その理論的言説を著していた知識人の片桐ユズルについて、その思想と行動について考察した。また、鶴見が大学や「思想の科学」といった媒体とも関係する人々のネットワークから、片桐、中川五郎、室謙二らの「ベ平連」や「東京フォーク・ゲリラ」という「フォークソング運動」の実践とそこに鶴見の限界芸術論がどのように影響を与えたのかについて言説や歌詞などから分析し、その影響によって鶴見の議論が大衆文化のなかに展開されていったということを明らかにした。ここから、西洋音楽の非専門家であるフォークシンガーを中心としながら片桐のような知識人が関わり、限界芸術論が応用されていったことの内容の一端を示すことが出来たと思われる。そして、フォークソングに関わる人たちは必ずしも専門家ではない、あるいは音楽を社会運動との関わりの中で捉えるという動きとも連動していたということが確認された。それは、テオドル・アドルノのような大衆文化の捉え方というよりも、鶴見が大衆文化を捉えた議論と親和的であるということだと考えられる。

そして、ほぼ同時期の日本における音楽文化という新たな言説の構築の動きを、「うたうたうた フォーク・リポート」を中心とした雑誌の言説と、そこに関わった人物の言説から考察した。「フォーク・リポート」は日本におけるインディペンデントレーベルの草分けといわれる URC レコードの広報誌として創刊された雑誌であり、いわゆる商業誌とは一線を画す活動であった。これまで、その内容についてはほとんど研究されてこなかったが、これはちょうどベトナム反戦運動のエージェントとも重なっていて、「ベ平連ニュース」や「思想の科学」とも執筆者が交差していた。ポピュラー音楽文化における批評言説は、人的なネットワークとも関連していたのである。これは反戦フォーク運動が、ベ平連の活動とも共振していたということからも理解されよう。

鶴見が限界芸術の特徴として引き出した、「限界芸術は、非専門家によってつくられ、非専門的享受者によって享受される」というところについて、それを「素人」の表現文化として読み込むことによって積極的に実践していた関西のフォーク運動については時代の流れの中で変容し衰退して行くのだが、その流れの中で表現者として活動して行った、中川五郎についてインタビューやフォークソングの活動を通じて、鶴見の思想との共振がうたのなかに見出せるということを描いた。また、中川が「フォーク歌手」、「編集者」「作家」となった軌跡を辿ることで、「素人」が表現の世界においてどのように活動をしていったのかについて、日本の70年代から80年代の社会状況とパラレルに進行していったということを指摘した。

鶴見の大衆文化論は、限界芸術からそのロジックには一貫しているところがあるように考えられる。それは、中川のライフコースとも交差するところであるが、雑誌やレコード、テレビというように表現や文化を媒介するものが変化しても、そこで行われる人々（つまり個人やその集まりである小集団）の表現に対する行動というものに、変化や批判ではなく常に一貫するものを見ようとする態度であろうと思われる。つまり、「素人」から表現の世界に流入していったものを、どのようなメディアであろうとそれを限界芸術が根底にあるものとして捉える視点である。それが、うたの問題であれば「冗談音楽」の野坂昭如であったり、あるいは小説であれば与謝野晶子の作品であったりするものである。これが、鶴見の文化論に通底する一つの思想である。その実践は、片桐ユズルと中川五郎にも変奏されながら続いていっているものであろう。

鶴見が自身のプラグマティズムの研究から日本の芸術や大衆文化を記述するために考案した

「限界芸術論」は、「フォークソング運動」を中心とした音楽文化へ受容、展開され、そこで行動する人々との運動の交差が浮かび上がった。これは「ベ平連」のような社会運動とも部分的に関係するものであった。それは、フォークソングが浮かび上がらせた表現と「素人」の問題が、実践者によって読み替えられ表現の問題と繋がっていたのだと考えられる。本論はこの流れのなかに、「限界芸術論」の文化社会学研究へのアクチュアリティを考察した。本論の分析によって、鶴見の文化論のなかでも『限界芸術論』の大衆文化との関わりから、鶴見の思想が文化として実践されるなかでどのように「使用」され、応用、変容していったのかということが明らかにされた。この視座から、本論は鶴見の文化と社会理論についての研究としての意義が見出されるのではないかと考える。